小説日本興業銀行

第二部

高杉 良

小説日本興業銀行 第二部
高杉 良
© Ryo Takasugi 1990

1990年11月15日第1刷発行

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 東京(03)945-1111(大代表)
Printed in Japan

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

デザイン——菊地信義
製版——豊国印刷株式会社
印刷——豊国印刷株式会社
製本——株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは文庫出版部あてにお願いいたします。 (庫)

ISBN4-06-184777-5

江苏工业学院图书馆
藏书章

講談社文庫

小説日本興業銀行

第二部

高杉 良

講談社

目次

第七章　深夜の英文タイピスト　6
第八章　大臣からの極秘情報　55
第九章　〝AorB〟の選択　73
第十章　昭電疑獄　126
第十一章　芦田内閣の倒閣　191
第十二章　再建整備完了　266

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

同名の単行本（一九八七年　角川書店刊）を大幅に増補し、五部構成とした第二部です。

小説日本興業銀行 第二部

第七章　深夜の英文タイピスト

1

日本興業銀行副総裁の二宮善基が総司令部（GHQ）経済科学局（ESS）証券課長のブレントリンガーと新橋の料亭で会食したのは、昭和二十二年十月十五日の夜である。

二宮の誘いに対してプライベートになら会ってもよい、というのがブレントリンガーの返事であった。

もっともブレントリンガーは部下のアリソンを伴ってあらわれた。

興銀OBの貞永敬甫（石産金属社長）が同席、興銀側で用意した日本人通訳を含めて五人の宴席となった。

プライベートであろうとなんであろうと言いたいことは言わしてもらう、とてぐすね引いて宴

席に臨んだ二宮は、アルコールも手伝って、ときおりべらんめえ調をまじえてずけずけ発言し、貞永をハラハラさせた。

「証券課はアンチ興銀の急先鋒と聞いてるが、いわれのない反感に基づくものです。興銀的機能の存続を、日本政府も金融界も挙げて願っているのに何故、反対するんですか。反対する根拠なんかあるわけがない。おかしいじゃねえか」

といった調子である。

しかし、通訳がセーブしてトーンダウンさせてしまうので、二宮のニュアンスが正確に相手に伝わるわけはなかった。

ブレントリンガーはにやにやしていることが多いが、アリソンは戦闘的であり、ひどく権高な態度だった。

「興銀が戦争に協力した戦犯銀行であることはまぎれもない事実ではないか。なんなら、興銀がどれだけ軍需産業に融資したか、教えてやろうか」

「なにをたわけたことを言ってるんだ。全部俺たちが教えてやったことじゃねえか」

二宮は猪口をぐっと呷って、苦笑しながらつづけた。

「興銀は司令部から要求された資料はすべて提出してるが、その中に軍需産業に対する融資リストが入ってることは百も承知だよ。興銀が軍の命令にどれだけ抵抗してきたか、とくと調べてもらいたいもんだ。たしかに興銀は総動員法などに基づいて中島飛行機その他に融資したことは認めるが、政府の命令融資を拒否できるわけがねえじゃねえか」

「興銀は即刻クローズされて然るべきだ。金融課長のビープラットが手ぬるいから、まだ愚図愚図してるが、それも時間の問題だろう」

通訳が顔色を変えた。その語尾がふるえている。

貞永がハッとした顔を二宮のほうへ向けた。

「クローズなんてとんでもない。そんなことをしたら、日本の産業の復興はできなくなる。クローズというのは、一セクション、つまり証券課の希望的観測に過ぎないんじゃないのか」

二宮は負けずに言い返したが、胸の中は波立っていた。

「ブレントリンガー課長にお訊きしたいが、いまのアリソンさんの発言は、不穏当ではないのか。われわれは、興銀がクローズされるなんて聞いてませんぜ」

二宮に詰め寄られて、ブレントリンガーは当惑して、顔をしかめた。

「まったく聞き捨てならん。暴言じゃねえか。ひでえもんだ」

二宮がぶつくさひとりごちて、手酌で猪口を満たしたとき、ブレントリンガーがぐいと顎を突き出して、二宮を鋭くとらえた。

「銀行はすべからく商業銀行であるべきだとわれわれは考えている。これは、ESSのコンセンサスになりつつあることはたしかだ」

通訳は度を失って、切羽詰まったような声を押し出している。

貞永がなにか言いかけた二宮を制して、穏やかに返した。

「日本の産業はどうなってもいいということですか。長期資金を供給する特殊銀行の存在を許さ

ないということになりますと、産業の復興は考えられませんよ」
　アリソンがしたり顔で言った。
「日本の産業界が長期資金を必要とする事情は認めるが、資金の供給機関が特銀でなければならないということはないはずだ」
「それ以外に長期資金を集める方法があれば教えてもらいてえな」
　二宮は頬がひきつるのを覚えた。
「証券市場によって賄われるべきだ。それが健全な資本主義の本来のあるべき姿ではないか」
「アメリカならそれもできるだろうが、ここは日本なんだ。それも戦争で疲弊し、食う物も着る物もろくにない……」
　二宮の話を通訳し終えないうちに、貞永が補足した。
「日本では証券市場がアメリカのように成熟していません」
「まったくだ。勉強不足も甚だしい。なんにもわかっちゃいねえんだから、話にならん」
　二宮の話はほとんどカットされたが、貞永の話は正確に通訳されたとみえ、アリソンが箸の代わりに使っていたフォークをテーブルの上に放り出して、返した。
「日本の証券市場がアメリカのように成熟してないことはたしかだろうが、一歩でもアメリカに近づく努力がなされて然るべきではないのかね。それに日本の証券会社は、証券市場を育成するためにも特銀は存在すべきではないと言っている」
「貞永さん、ひでえもんですね。証券会社にすっかり毒されてますよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

二宮が貞永のほうへ首をねじって、いまいましそうに言った。
アリソンが通訳のほうへ顔を向けて、催促したが、通訳はどうしたものか途方に暮れている。
「かまわないから、俺の言ったことをはっきり伝えてやってくれ。こうなったらやけくそだ」
二宮は冗談めかして言ったが、ほとんど本気であった。
帰りがけにブレントリンガーが二宮に握手を求めてきた。
「握手なんてしたくないが、しょうがねえか」
二宮は、照れくさそうにつぶやいて、グローブのような大きな毛深い手を握り返した。
料亭の玄関で靴の紐を結び終わったブレントリンガーがにたっと二宮に笑いかけた。
「ミスター二宮は率直な態度で好感がもてる。ミスター二宮は好きになれそうだが、興銀は好きになれない。興銀は嫌いだ」
「俺はいくら嫌われてもいいから、興銀を好きになってくれなければ困るんだ。いやもっと興銀というものを調べて勉強してくれれば必ず好きになるはずだ」
二宮は急いで言い返したが、ブレントリンガーとアリソンは通訳を無視して、もう背中を見せていた。
「大枚をはたいて、料亭に招待して興銀のクローズは時間の問題だなんて言われてれば世話はないですね」
二人を送り出したあとで二宮がぼやいた。
「クローズなんて信じられん。かれらのあてずっぽうに過ぎんよ」

貞永は、二宮を慰めたが、表情は冴えなかった。

あくる日、中山素平が朝一番に副総裁室に顔を出した。中山は、二宮がブレントリンガーと会食することを事前に聞いていたので、首尾のほどを気にしていたのだ。

「話にならん」

と、二宮はぶっきらぼうに言って、どかっとソファに腰をおろした。

「アリソンとかいう若い担当官を連れて来たが、こいつが箸にも棒にもかからん奴ときている」

二宮は不愉快きわまりないといった顔で、昨夜のことを中山に話した。

中山が溜息まじりに言った。

「アリソンといえばわたしも屈辱的な思いをさせられたことがあります。興銀が保有していた日興証券の株を全部手放せということで、ＥＳＳの証券課にテルさん（日高輝証券部長）と二人で呼びつけられたことがあるんですが、そのとき、テルさんはお葬式にぶつかって、ちょっと遅刻したんです。わたしはそのことを説明して謝ったんですが、〝なんなら興銀の葬式を出してやってもいいぞ〟って、にこりともせずに言うんです」

「興銀の葬式ねえ、よっぽど興銀をクローズに追い込みたいんだなあ」

二宮は虚空の一点を見つめている。

「ニュートラルであるはずの財政課は、日本固有の金融機構を保持すべきだとビープラット金融課長の考え方に同調しているという情報を松田君がもたらしてくれました。金融課と証券課の綱

引きはまだつづくかもしれませんが、帰するところ財政課の判断によって左右されると思うんです。財政課のルカウント課長が興銀に理解を示してくれてることは心丈夫ですよ」

「しかし、興銀の評判は悪過ぎるからなあ。戦犯銀行と言われるとどうしようもねえもんなあ」

「二宮さんにしては弱気じゃないですか。元気を出してくださいよ」

中山はことさらに明るい顔で返した。しかし、楽観はゆるされない、いや悲観すべき状況にあることは認めざるを得ないように思える。中山は重い気分で、理事室に戻った。

中山が副総裁室から理事室に戻って一時間ほど経ったとき、秘書嬢が二宮が呼んでいると伝えに来た。

中山は読みかけの書類を抽き出しにしまって、副総裁室へ急いだ。

三ツ本常彦がソファで二宮と話していた。

「やあ、元気そうだね」

中山は、三ツ本の隣に腰をおろした。

「小舅みたいなのが多くて、気骨が折れますよ。興銀とは違うから、言いたいことも言えないし……。興銀ぐらい住み心地のいいところはないですよ。大蔵省へ出て、つくづくわかりました」

「大蔵官僚なんてくそくらえっていう顔をしてるじゃないの。三ツ本が言いたいことも言えないなんて考えられんな」

中山がひやかすと、三ツ本は肩をすくめた。

「まあ、わたしは大蔵省に来てやったんだっていう顔をしてますけどね。だからよけい憎まれる

のかもしれないな」
「そうだろう。遠慮するような柄じゃないよ」
二宮が口を挟んだ。
「大蔵の秘書官ともなると、たいしたもんだな。クルマを自由に使えるそうだ。興銀では理事だってそうはいかん」
「ところで、きょうはなにかいい話でもあるのかい」
と中山が訊いた。
「あんまりいい話でもないけど、きのう栗栖大臣がマーカット局長と会見したときのことを話しておこうと思って……。実は午前中いっぱい来客がつづくんで油を売りに来たんですけどね」
三ツ本は緑茶をすってから、話をつづけた。
「きのうの会見は、いつになく長時間に及んで金融機関の再建整備に関連して、銀行、信託会社などのありかたについて局長と大臣の間にやりとりがありました」
二宮と中山の表情がひきしまった。
「興銀に関連する話を先にしますと、特銀は、特別法による特典を排除して一般銀行とすべきだというのがマーカットの意見です」
二宮と中山が顔を見合わせた。二宮は昨夜、ＥＳＳのブレントリンガー証券課長とアリソン課員から、興銀のクローズは時間の問題だ、と聞いたばかりである。
「マーカット少将は、興銀をクローズする、とは言ってないんだな」

二宮が急き込むように訊いた。
「そんなことは言ってません。マーカットは例えばと念を押したうえで、金融機関のありかたについて一応の考えかたを示したということじゃないんですか」
「栗栖さんから、意見は言わなかったの」
中山の質問に、三ツ本は「もちろん言いましたよ」と、胸を反り返すような姿勢で、アクセントをつけて答えた。
中山がじれったそうに先を促した。
「それで、栗栖さんはなんて反論したの」
「特殊銀行の一般銀行化は一応もっとものように思えるが、特銀が普通の預金銀行となるか債券発行銀行となるかは、あくまで当該銀行の自由な選択によるべきだ、と主張してました。柏木君も正確に通訳してたように思えましたけどねえ」
柏木雄介は昭和十六年前期に大蔵省に入省した事務官で、省内有数の英語の使い手として聞こえている。渡辺武（昭和十三年入省）渉外部長の下で、GHQとの折衝に当たっていた。
三ツ本がメモを見ながら話をつづけた。
「さらに、日本においては証券投資層の発達がもともと不充分なうえに、保証打ち切りなどの措置により大きな打撃を受けている。したがって米国と異なり、債券の発行によって長期信用を主業とする銀行がどうしても必要だと強調しました。たしか、少なくとも二つ以上の債券発行銀行がなければならない、と大臣は言ったはずです」

「マーカット少将の反応はどんなふうだった」
と、中山が訊いた。
「ま、一応聞きおくということなんでしょうが、同席したＥＳＳ顧問のファイン博士は、しきりにうなずいてました。今後の事務的折衝はビープラット金融課長、ルカウント財政課長と大蔵省事務当局でやるようにとマーカットは言ってましたが、栗栖大臣は、重要な問題はその都度マーカット少将とわたしとで話し合いたいと主張し、マーカットも了承してました」
「ルカウントって、例のトーマスの後任だな」
二宮は三ツ本がうなずくのをたしかめてから、つづけて言った。
「たしかルカウントもニューヨーク・ファースト・ナショナル・シティ・バンクのバンコック支店長を経験したんじゃなかったかな」
「そう聞いてます」
「それなら興銀に理解をもってるはずだな。好都合じゃねえか」
二宮は口もとをほころばせた。けさがたは、あんなにうちしおれていたのに――そう思うと、中山は微笑を誘われる。
「栗栖さんは、主張すべきは主張し、切り返すところは切り返すし、実にすっきりしてますよ。勉強もしてるし、知識も豊富で、なかなかたいした人ですよ」
「改めて見直したようだね」
「厭なところもありますけどね。司令部に対する限り、目下のところはまあまあじゃないです

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton